

卷 頭 言

昭和三十年を顧みて

副会長 蜂 谷 茂 雄



言い古された言葉ではあるが、実に光陰は矢の如く、昭和三十年も余すところいくばくもなくなつた。過ぎ去らんとする昭和三十年に於ける当協会並に鉄鋼界の足跡を顧み、更に問題点について些か触れてみたいと思う。

本年は当協会としては大正四年に発足以来四十周年目に当り、4月6日東京大学に於て盛大に四十周年記念祝賀式を挙行することが出来たことは誠に目出度い限りであつた。

記念事業の一つとして「戦後十年間に於ける本邦鉄鋼技術の進歩」と題して鉄鋼技術の各部門の権威者の執筆になる四十周年記念号を『鉄と鋼』7月号として発刊したのであるが、極めて好評を博し、会員のみならず鉄鋼関係方面の人々のためにも裨益するところ少からざるものがあつた。

去る3月中旬、八幡製鉄株式会社により製鋼技術指導のために招聘せられた独逸鉄鋼界は勿論、世界的に鉄鋼に関する学者として第一人者である独逸鉄鋼協会々長 Dr. Herman Schenck が当協会のために4月5日東京大学に於て、「製鉄業に於ける科学的熟慮とその断行」と題する特別講演をして下さつたことは、四十周年記念事業に錦上更に花を添えたものであり、我々の感銘も又一入深いものがあつた。Dr. Schenck は冶金学界の泰斗であられるばかりでなく真に敬服に値する技術者であり、八幡製鉄所に於ては平炉製鋼作業について自ら造滓、脱酸等精錬作業の各段階に亘つて、シエンク理論に立脚した實際製鋼法を直接に指導せられたのであつて、筆者も直接にその説明を聞き、キルド鋼の精錬について大いに得るところがあり、我が国製鋼法に対する警告とも感ぜられた。同博士は滞日僅かに一ヶ月の極めて多忙な日程であつたにも拘らず、特に関西地方の当協会々員の熱望に応じて4月15日京都大学に於て更に講演をして頂き多数の会員諸君が直接その警咳に接することが出来たことは誠に幸であつた。

更に、記念事業の一つとして戦時中の混乱のため創立三十周年記念事業挙行之機を失つたので今回過去二十年間に亘る「鉄と鋼」の論文総目録を編輯することとなり、編輯委員諸君の非常なお骨折により着々進捗し、12月中には完了の見込みである。これ等記念事業の遂行に当り経費百万円を計上して賛助会員の各会社その他に御寄附をお願いしたところ、幸にして予定通りの寄附金額に達し滞りなく四十周年記念事業を完遂し得ることは会員諸君と共に慶びに堪えず、茲に諸会社並に委員各位の御好意と御努力に対して深甚な敬意と謝意を表する次第である。

恒例の秋期講演大会は北海道札幌市北海道大学で挙行されたが多数会員諸君の参加によつて極めて盛大に有意義に終了することが出来た。

又、昨年10月、通産省重工業局、鉄鋼連盟、並に当協会との三者共同による研究機関として鉄鋼技術共同研究会の再発足を見たが、現在各研究部会に於て真剣なる研究討議が行われ、その成果も着々として現われつつあることは大いに期待してよいであろう。

又、当協会各支部の活動を観るに、関西支部を初めとして各支部共極めて活発熱心に夫々、研究会、講演会、見学会等実情に即した運営が行われ、当協会設立の目的に副うべく不断の努力が続けられている。就中、去る7月、中国四国支部が淀川製鋼常務取締役浜田正信氏を支部長として再建発足したことは支部活動拡大のために欣快に堪えないところである。

以上、昭和三十年に於ける当協会活動の概観について述べたが翻つて我が国鉄鋼界を觀るに、昨秋以來、好況に向い、本年に及んで更に其の度を増し、内需に輸出に活況を呈するに至つた。特に輸出の伸長は見るべきものがあり昨年度二百五万吨に達し新記録を挙げ、本年度も又、引続いて好調を堅持している。

このような鉄鋼需要の増加は勢い鉄鋼増産の必要に迫られ、各社は挙つて増産に拍車をかけることになつた。然るに鉄源としての屑鉄は、輸入屑鉄価格の騰貴、フレートの昂騰により海外屑鉄の入手は漸く困難となり、一方、国内屑鉄も払底を來たし屑鉄需給は極度に逼迫し鉄鋼増産の一大隘路となつた。このような状勢は勢い、売惜み、買漁さり、果ては屑鉄カルテル価格協定違反に及び鉄鋼業界の足並は急激に崩れを見せ、遂に10月6日屑鉄カルテルは崩壊の悲運に遭い、次いで通産省の鉄鋼輸出抑制措置となり、鉄鋼業界は大混乱に陥つた。これは鉄鋼需要の急増に伴う増産が自主統制の不徹底の儘に強行されたことに起因していると考えられるが誠に嘆かわしいことである。

昭和26年以來、鉄鋼界は挙げて設備合理化に邁進し、その設備も殆んど完成してその威力が漸く發揮せられるに至り、生産コストも低下し、その能率も向上し、大增産すべき秋に遭遇しながら、このような混乱に陥り、輸出の抑制、生産制限の止むなきに至つたことは鉄鋼人として全く遺憾に堪えないところである。

今こそ鉄鋼業界は謙虚な反省の上に立つて一日も早く自主統制による増産態勢の再現を図るべきであろう。又、工業のバックグラウンドが狹隘で、屑鉄供給の不十分な我が国に於ては、鉄鋼生産方式としても鉄鋼大增産のためには、銑鉄の増産により、銑鉄鉍石法、又は転炉製鋼法による以外にない宿命にある。昭和15年10月、米國が我が國に対する經濟封鎖の第一手段として年間二百万吨に及んだ屑鉄の輸出禁止を断行したため、我が國製鋼業界は好むと好まざるとに拘らず、銑鉄鉍石法に移行せざるを得なかつた苦い經驗を今一度想起し、屑鉄依存の製鋼法より脱却して、安定して増産し得る銑鉄鉍石法と転炉法に漸次必要度に応じて移行すべきではなからうか。

今や鉄鋼は、輸出産業として最重要なものとなり、且又、造船、車輛、機械等の輸出の助長のためにも、將又、基礎産業としても益々重大なる使命を担うに至つたのであるが、設備合理化も急速に進捗し歐米製鉄業のレベルに略々到達し得たのであるから、今後は官民協力して製鉄原料の獲得に努力し、何時にても増産の要請に応じ得る態勢を整うるのが鉄鋼界の責任ではなからうか。

幸にして近年オーストリア、獨逸等に上吹転炉製鋼法により、平炉鋼に優るとも劣らぬ鋼の精鍊が成功を見るに至り、又、我が國に於ても既に実験期を脱し、八幡製鉄、日本鋼管の如く愈々近く大量生産の設備を実施するに至りつゝあることは屑鉄対策並に能率向上の面からも極めて有利にして、最も時宜に適した方策と言うべく、その實現の一日も速かならんことを期待するものである。

以上、甚だ杜撰ながら請わるゝまゝに昭和三十年の当協会の活動並に鉄鋼界の問題点を回顧し些か私見を述べて責の一端を果した次第である。